熊本大学学術リポジトリ

終焉の崇美（父の霊を吊ふ）：雑録

著者	鳳章
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１１３
ページ	４８-５１
発行年	1905-11-03
その他の言語のタイトル	終焉の崇美（父の霊を吊ふ）：雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5873

此境地に至りて歌ひし讃歌にあらずや。

靜寂なる夜、無限神靈の宮殿に立ちて遙かに蒼天を仰ぐとき、尊嚴の感と喜樂の念と胸中に滿つ、清くすめる虫の歌は我戀人の私語の如く、吹き來る清風は我をば天の彼方に連れ行くかと感せらる、此のうちに我は神と交はり神に語る、かくて聲なき聲をきゝ、形なき姿に觸る、我その形を云はんと欲すれども言を絶す、此の境そは我所謂修養の極致なり

終焉の崇美

（父の靈を吊ふ）

鳳章

秋風の誘ふまゝに、父は永き眠に入りぬ。

洩れ易き青春奔放の氣を堅く秘めて、靜かに病父の看護と兼ねて家庭の俗務とに鞅掌せしこと百餘日、父は悶ゑぬ、母は憂ひぬ、吾れは獨り運命の數奇を笑ひたりき。

雲の峰墜ちて秋天漸く高きに、再び他鄕に學ぶ頃となりぬ。

多恨の遊子は再三醫師に聞いて、病める父と悲しめる母とを故山の秋に殘して去んぬ。敗餘の心身を鼓舞して銀杏城下の勇將たらむとせしも、秋はこゝにも滿ちて、悲哀の韻は情を衝いて切に、苦悶襲ひ來りて夢圖かならず。

客となりて四日、飛報は遂に遊子を拉して歸路を急がしめぬ。

秋風一路、瀋車に歌よむ人もあらむに、遊子は徒らに想像の擒となりて、仰いで月に、俯して虫に、訴へんと欲すれども、乱れし胸の緒琴はそよとの響をも傳へざるこそ悲しけれ。

あゝ歸れば父は逝けり、双の清眸一度萬有より閉ぢてまた還らず。

心緒乱れて麻の如きが中に、萬感集まり來りて蝟の如し、然れども今や吾れは徒らに父の死を悲しみて、秋に泣くべき身にあらず、男子有情の極は無情に似たり、逝くものをして逝かしめよ、たゞ問ふべきは唯一、父の臨終如何なりしかと。

母は答へて云ふ、悶えず、泣かず、笑はず、憂へず、更に遠く遊べる子に就いて一句の遺す所無かりき、仰臥瞑目、靜かに塵の世を去れり、たゞその數分前に云へりき、「吾れやがて死せむ」と。

是れある哉、父も亦長しへに人の子の崇美と光榮とを失はず。

回顧すれば父は果斷の人なりき、躊躇逡巡するを忌む事蛇蝎よりも甚しかりき、弱冠その兩親を失ひしより獨力奮鬪の生活を續けて、六十二歳の今日に至るまで猶ほその意力を失はず、轗軻落魄の境に立つも、不遇失意の域に入るも、毫も人權の大を毀損する事無かりき、躰軀長ならずと雖も大、生氣光澤、人に逼るの概あり、晩年山の如き俗務を背負いて少しく鬚眉の白を增しゝが如きも、その高齡に比すれば猶ほ綽々の餘裕あり、吾れ誠にこの長所に服したりき、然れども世の風波に漂ふ事斯くの如くなるに從ひて、よく俗才に長するも、眞個人間の靈活なる情緒に於て、或は少しく缺陷の存するあるを疑ひたりき、果然一たび病床の人となりてより、徒らに煩悶愚痴、その世情を解せるに反し、人情を辨せざる傾きあり、或は咀ひ、或は嘲り、或は訴へ、その脫兎の如かりし人

物は今や處女にも劣る人物たらむとするにあらざるなきかと、吾れは私かに憂心忡々たるものりき。我が子の前途を氣遣いて死を忌むは、寔に老父の情なり、吾れ不肖にして父を憂へしめしこと固より多けむ、然れども吾れは我が前途に光明燦として或るものゝ輝くを自ら信ず、爲めに少しく父に說いてその意を安せしめしことありき、父も亦よく賢、徒らに青春奔放の一場の氣焰と輕視せず、快諾して病床に莞爾たりき、あゝこれ我が銀杏城下に去るの晨、今にして思へば茫乎として夢に似たり。

かくて父は猶ほ刻々近づき來る死の暗流に逆航せむとせしものから、あはれ此の大宇宙の法則に對して、父の力は餘りに眇爾たるものなりき、よしその反抗の意氣は可なりとするも、人間眞情の流露し來りて靜かに死生の域を超絕し去り、塵界の煩惱を一掃し盡すの崇美は、何故に之れを求めざるや、悠然天國の堂に上るの光榮は、何故に與へられざるや、否求むるにあらじ、與へらるゝにあらざるべし、自から之れを得べきなり、これ我が疑問なりき、然り大なる疑問なりき。

疑問は忽ち氷釋せられたり、そは父未だ死の自覺を有せず、即ち未だ死生の巖頭に立てるを悟らざるに、何ぞ死生の域を超絕すべけむや、何ぞ天國の堂に上るべけむや、然れども一度死の自覺を得るや、そこに一つの煩悶なく憂愁なし、靜かに一身を死の手に委して、悠然人間の域を離る、唯曰く「吾れやがて死せむ」と、解脫は來りて忽ち祝福の光を灑ぐ、思ふ此の時、天門開けて鳩の如き神使は、父が靈魂を捧げて去りしを。

疑ひしものは禍なる哉、臨終の數分前に死の自覺を得し父は、やがて解脫の祝福をも得たり、美は

しかりし父の死は誠に人間の崇美と光榮とを値ひす、況んやその生の美はしかりしに於てをや。一生を美はしく送り來し、ものは、また美はしく死せむとこそ思べ、是れ人情の美点なり、然れども死の自覺なくむば解脱無し、解脱無くむば煩悶憂愁、遂に美はしき死を得ざるなり、あゝ自覺と解脱とは人情美の左右なり、上下なり、始終なり、然り、唯に死に就てのみ云ふべきにあらず、自覺の念と解脱の思ひとありて、あらゆる人情の美は完成するを得べけむのみ、前者はその頂点なればなり。

秋風恨み多きも父の死幸に之れを教ふ、徒らに秋に泣くべきにあらず、吾れ亦これによりて我が情を美にせむと欲す。(三十八年十月八日稿)